
銀の誓い

クォーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の誓い

【Nコード】

N5317BA

【作者名】

クオーツ

【あらすじ】

かつて家族を失った少年、加賀見恭弥は、今日も大切な人達を守るため、妖と戦う。

プロローグ（前書き）

つまらない作品ですが、楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

さて、どうしようか。

目の前に広がる光景を見ると、なんだか泣きたくなってくる。

「……………なあ、これどうしたらいい？」

「そりゃあ、全部倒すしかないでしょ」

恐ろしい光景を前にして呆然としている俺に、隣に立っている少女が、その蒼い長髪を風になびかせながら平然と言つてのける。

お前は どうせ 見て いる だけで 戦わ ない から そんな こと が 言える んだ、等 と思 わない 訳 で は ない が、彼女 の 言っ て いる こと は 紛れ も ない 事 実。

俺は、この少女の言うことに頷かざるを得なかった。

「……………はあ、明日も学校なんだけどな。今日は寝る時間無しか……………」

仕方が無い。これも街を守るためだ。

「ったく。……………それじゃ、今日もお仕事頑張りますか」

「はいはい、頑張つて」

「……………お前もう帰れよ……………」

ある一件以来周りをつろちよろするようになった彼女。正直その目的が全く読めず、恐ろしいことこの上ない。いつになったら消えてくれることやら。

嘆息混じりの俺の言葉も全く聞かず、少女は地面を蹴って宙に浮かび上がる。

「私、今日も空から観戦してるから、せいぜいいいところ見せてよね」

「はぁ……」

俺は再びため息を吐く。それと同時に体内の霊力を右手に集め、小さく呟いた。

「孤月^{こげつ}」

その途端、右の掌から銀色の光が溢れ出す。輝く光の粒はそのまま手の先で固まり敵を切り裂く刃と化して、俺の武器が完成した。

「よし、いくぞ……！」

俺は視界の先で蠢く異形のもの達に向かい、勢いよく駆け出した。

第一話 幼馴染

俺の朝はいつもこれで始まる。

「はい、今日もいい天気だよ！ さつさと起きる！ そしてご飯を食べる！」

大きな声で目を覚ました俺は、開いた目の先にあるいつもの顔を見て、ついたため息を吐いた。

「……なあ、毎日言ってるけど、勝手に人の家にかかるなよ」

「何言ってるの！ 私が来なかったら恭弥学校サボるでしょ！？ だからわざわざ毎日来てあげてるのに、その態度は許せんっ！！縛り首じゃあー！！！！！」

「ちよっ、やめっ……！！ うぐっ！」

死ぬ………もう死ぬ………！

俺は、何故か突然渾身の力で首を締めてきた目の前の少女から逃れようともがく、もがく、もがく……

「……………いや、ほんとに死ぬから！！！！！！」

「もー、だらしないなあ。いい年した若いものがこのくらいで音上げるなんて」

しかし、なんとか死の束縛から脱出した俺を待っていたのは、訳

の分からない言葉と共に向けられる呆れたような視線。

朝っぱらからこんな死闘を演じることになった俺は、疲労を隠すことも出来ずに呟く。

「……………もう、帰れよ……………あつ、この台詞昨日も言った気がする……………」

「……………何か言ったかな？」

「言っていない言っていない」

俺の小さな呟きに反応して、彼女が先程俺の命を刈りとうとしたその両手を再び構える。当然、被虐趣味のない俺は、前言撤回。

それに満足そうに頷く彼女を見て、安堵とともに更なる疲労を感じた。

「……………はあ。俺の周りに優しい奴はいないのだろうか……………」

さて、毎朝の苦難を今日も何とか乗り切ったところで、ちょっとした紹介を。

俺の名前は加賀見恭弥^{かがみきょうや}。家の近くの大森高校に通う、高校二年生だ。今現在は、この古ぼけたアパートで一人暮らしをしている。

実は夜に少し特殊な仕事をしていたりするのだが、そのことは周りの人達には秘密だ。もし知られてしまえば、無用な混乱を引き起こすことは目に見えているのだから。

そして、先程から人の家に勝手に入って好き勝手している彼女は、浪井綾。^{なみいあや}一応、俺の幼馴染だ。通っている高校は俺と同じく大森高校で、同学年同クラスでもある。

ちなみに、彼女の容姿はかなり良い。肩辺りまで伸ばしている髪は茶色がかっていてサラサラで、その髪型が実年齢より多少幼く見える可愛らしい顔に良く似合っている。それ故に、学校の男子達にも割と人気があつたりするのだ。

性格は先程の行動からも分かるように、良く言えば元気いっぱい、悪く言えば騒がしい。

まあ、綾に関してはこんなところだろう。要するに、うるさくてちよつと可愛い俺の幼馴染という訳だ。

さて、そんな彼女が何故朝から俺の家に来ているのか、当然誰もが疑問に思うことだろう。

同じことを不思議に思った俺が綾にこのことを聞いてみると、彼女曰く、幼馴染である俺が遅刻や欠席などをすると、クラスの皆や担任から彼女が責められるらしい。だから、そうならないよう俺の遅刻及び欠席を事前に防ぐためにここに来ている、と。

それは明らかに理不尽な話だと思ったのだが、綾は別に気にしていないようなので特に俺から何か言うこともない。実際、綾は俺が目覚めます前に朝食を作ってくれたりするので、かなり助かるのだ。

俺はとある出来事が原因で、十一歳の時に両親と兄を亡くしている。だから、普通は朝食を作ってくれるであろう母親というものが存在しない。

かといって自分で作るのも面倒だったので、綾にはこの点でのみは感謝しているのだ。

そう言うわけで、俺は今日もいつも通り平和（？）な朝を綾と共に過ごす。手早く朝食を済ませてから制服に着替え、昨日のうちに準備していた鞆を片手に、綾と二人で家を出る。

おんぼろアパートの二階にある自室の鍵を閉め、今にも崩れ落ちそうな階段を下りて、大森高校へと続く道を二人並んで歩き始めた。

「ふああ……」

「どうしたの？ あくびなんかして」

「……ん、いや……別に」

「別につてことはないでしょ？ 恭弥、夜に何かしてたんでしょ。駄目だよ、夜更かししちゃ」

「してないしてない」

まあ、思いっきりしたけど。

昨夜の仕事はかなり大変だったので、結局眠る時間が無かった。全てを終えて家に帰ってきたのが既に朝の五時頃で、綾が俺を起こしに来たのが七時頃だから、都合二時間しか睡眠をとれていないのだ。

ということで、眠いのは当たり前。しかし、夜の仕事をすることを綾

に言う訳にはいかないので、黙っているしかない。

ここで会話は途切れ、俺と綾は黙って学校までの道を歩く。

辺りに目を向けてみると、俺達と同じように学校へ向かっている生徒がちらほら見える。これはいつも通りの光景。そして、その生徒達が向けてくる生暖かい視線もいつものこと。

かなり不本意なことなのだが、毎朝一緒に登校している俺と綾は、俺達のことをよく知らない人達にカップルだと勘違いされているようなのだ。

たしかに、毎日毎日飽きもせずいちやつきながら登校しているカップルは幾人が見られる。しかし、それが俺達にも適用されるのはおかしいだろう。

この無言で歩く重苦しい登校を見て、どうしてカップルなどと思えようか。

というわけで、とても気まずいです。

先程から急に難しい顔をして黙り込んでしまった綾の方に視線を向ける。一体何を考えているのか、俺に見られていることにも気がついていない。

普段ならもつとやかましく騒ぎ立てながらの登校なのだが、どうも今日はそうならならしい。やはり、少しばかり心配になる。

綾をじっと見つめていた俺は、意を決して彼女にどうかしたのかと訊ねようとして……

「……………ね、ちょっといい……………」

「ん？ 何だよ」

「恭弥、もしかしてまた夜遊びしてるわけじゃない、よね……………」

「……………夜遊び？」

何の話だろうか。俺がしているのは、遊びではなく仕事……………
あ。

そう言えば、一度、仕事で夜に外出しているところを彼女に見られたことがあった。その時は俺の両親が亡くなってから間も無かった時だったので、ショックでそういう道に走ったとも思われていたのだろう。

まあ、たしかにあの時はいつも通りの精神状態ではいらなかったわけだけども。

「ねえ、どうなの？ もし、また昔みたいにそんなことしてるんだったら……………」

「心配いらないって。昨日はちょっと遅くまでテレビ見てただけだから。それに俺、夜遊びなんて一度もしたことないし」

「でも恭弥、何年前にも……………」

「いや、あれは別に夜遊びしてたわけじゃないからな」

綾が本気で心配してくれているのは分かる。しかし、実際夜遊びなんてしていないのだから、他に言うようなないのだ。

俺は綾の目をしっかりと見つめて、嘘をついていないことを彼女に分からせようと試みてみる。

「……………分かった。やってないならいい……………」

……ふう。完全に信じてくれた訳ではなさそうだけど、とりあえずこの場は乗り切った。

隣で綾が、納得出来ていないような顔をしているのは、この際気にしないことにしよう。

そういうことで、俺達は、また無言で学校へ向かって歩いていく。

再び先程の気まずさが戻ってきてしまい、居心地の悪いこと悪いこと。こんな状況を早く終わらせたい俺は、無意識のうちに早歩きになる。

そして、その気まずさに耐えながら歩いていると、とうとう視界に大きな建物が入ってきた。

そう、我らが学び舎、大森高校だ。特に綺麗という訳でも汚いという訳でもなく、無難な外観の校舎。通っている生徒の学力も、高いことはないが、低い訳でもない。そんな普通の高校なのに、何故か妙な生徒が幾人も。

まあとにかく、俺が通っている高校なわけだ。それが見えてきたということは、先程の会話で随分と重苦しくなってしまったこの空

気ともやつとおさらば出来る。

そんなことを考えながら学校に向かって歩き、校門をくぐったところで突然誰かに後ろから声を掛けられた。

「ふむ、今日も二人でラブラブ登校か。お前達もよく朝からそこま
で出来るな」

「お、真司。おはよう。あと俺達はラブラブじゃないぞ」

はい、ということだ。

彼の名前は玉木真司^{たまきしんじ}。俺や綾と同じ大森高校に通う高校二年生で、
クラスも同じイケメン君だ。

イケメン。要するに顔がかっこいい。しかも、普通に俳優やモデル
として通用するのではないかという程かっこいい。

しかし、そんな彼にも欠点というものは当然あるわけで。

「ああ、おはよう。それにしても、浪井さんは今日もいい具合に口
りっているな。どうだ、これから俺と一緒にお茶でも……」

「今から行くのは教室だ！ お前くだらないこと言っていないで、さ
っさと先に行ってくれよ」

彼は変態です。

そう、玉木真司は紛うことなき変態なのだ。しかも、女性の守備
範囲は相当広く、下は小学生低学年から、上は五十代の熟女までと

いう徹底した変態ぶり。折角のイケメンが台無しだ。

「何故俺だけ先に行かなくてはならなんだ。それでは浪井さんの後ろから階段を上がり、その下着を覗くという俺の計画が破綻してしまうではないか」

「ちょっと！ さっきから黙って聞いてれば、ロリだの下着覗くだの二人共最低だよ！！ 私、一人で行ってるから！！」

「えっ！ 俺も最低な訳！？」

綾は怒って先に行ってしまった。俺は何も言っていないというのに、今の言葉はおかしいだろう。それもこれも、悪いのは全て……

「おい、真司。お前のせいで綾が怒ったじゃないか。どうするんだよ」

「いや、お前のせいだろう恭弥。なにせ俺は何もまずいことなどしていないのだから」

「……それ、もしかして本気で言ってるのか……？」

「俺はいたって本気だ」

「……………」

まあ、こんなところで不毛な争いをしていても仕方が無いので、俺達も昇降口で靴を履き替え、教室に向かうことにする。

「それで？」

「ん？」

「それで、どうして浪井さんは朝っぱらからあんな顔をしていたんだ」

黙って階段を上っていた俺は、いきなりそんなことを訊ねられて少し驚く。

彼は、俺達の様子がいつもと違うことに気づいていたのだ。それで、空気を軽くするためにわざとあんなふざけたことを言ってきたのだろう。

普段の態度から誤解されがちだが、彼は決して悪い人間ではない。むしろ、その反対なのだ。

「俺は、あんな沈んだ浪井さんにセクハラをしてもあまり楽しくない。彼女の元気を取り戻すためなら、喜んで手を貸そう」

……………多分、悪い人間ではないと思う……………。

「……………あれは別に大したことじゃないぞ。綾の奴、なんか俺が夜遊びしてるんじゃないかって勘繰ってるみたいなんだ。まあ心配してくれるのは嬉しいけど、実際夜遊びなんてしてないのにな」

「そうか。それは朝から災難だったな。まあ、なるべく彼女には心配を掛けさせないようにした方がいいだろう」

「ん、そうだな」

今言った通り、綾は本気で俺の心配をしてくれている。それ故に、俺がしている仕事のことをずっと隠しているのは心苦しいのだ。出来ることなら言ってしまいたい。

「……………ま、そんなことしたって余計に心配かけるだけだしな。それに、俺の正体を知ったらあいつだって……………」

「何か言ったか？」

「あ、いや何でもない。ほら、もう教室に着いたし早く入ろう」

そうこうしているうちに教室の扉の前までやって来ていた俺は、気持ちをきっちり切り替えて扉を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5317ba/>

銀の誓い

2012年1月14日22時51分発行